

あるむぜお63

府中市郷土の森博物館だより

a l museo NO.63

2003年3月20日



府中ロストワールド

4

目次

- 1-2 府中ロストワールド 4
- 3 詩人 村野四郎記念館オープン
- 4-5 ノート「川の自然観察考2 川は魚の通り道」
- 6 最近の発掘調査 西府町で後期古墳を発見！
- 7 府中発掘事始4 分倍河原合戦の亡骨を求めて
- 8 展示室から・元気！ボランティアだより

鹿

村野四郎

鹿は 森のはずれの
夕日の中に じっと立っていた
彼は知っていた
小さい額が狙われているのを





けれども 彼に
どうすることが出来ただろう
彼は すんなり立って
村の方を見ていた
生きる時間が黄金のように光る
彼の棲家である
大きい森の夜を背景にして

府中ロストワールド

記録の中にしかみることのできない失われた風景を
1980年（昭和55）府中市発行の
写真集「むかしの府中」に探してみます

4 遠望

「むかしの府中」No.234

1950年（昭和25）頃

現 府中市本町1・2丁目付近

府中は、市域の中央部分を東西にハケ（段丘崖）が貫いています。ハケの上下では6m前後の標高差があり、ハケ上からの眺望は格別だったようです。

そうした景色を撮影した写真の中から、御殿地から見た西方の眺望を選んでみました。手前に見えるのは府中本町の駅舎、その先には田んぼが一面に広がっています。田んぼの向こうに低く横たわるのは多摩丘陵と関東山地、そして富士山の山影が薄っすらと見渡せます。

こうした景色が「失われた風景」であることはいうまでもありませんが、ここで話題にしたいのはビューポイントである御殿地です。

いまはもう「御殿地」の名前すら知る人は少ないようですが、府中本町駅やその東側の隣接地（現 駐車場）の付近はハケが南方へ突出し、三方に眺望の開けた、まさに景勝地でした。しかし残念なことに、府中本町駅の拡張や工場の進出により、御殿地はもとの姿を大きく変え、写真のビューポイントそのものが失われてしまいました。

「御殿地」の名は、徳川家康が鷹狩や多摩川での川狩の際に休憩・宿泊した御殿の存在したことに因みます。御殿の建造は家康の江戸入府の直後で、その後2代秀忠・3代家光といった将軍により引き続き利用されましたが、1646年（正保3）の府中大火により類焼し、再建されることはありませんでした。

1724年（享保9）には、開墾されて畑地となり、「御殿地」の地名を残すのみとなったのです。

ところが面白いことに、この御殿地は江戸時代の後期になると再び脚光を浴びます。『新編武蔵風土記稿』や『江戸名所図会』といった地誌が、古代国府成立前の武蔵国造の居館跡として紹介するのです。この説の出所は、『武蔵国多摩郡府中故事』という府中本町出身の江戸時代中期の宗教家・依田伊織が著した1冊の書物のようですが、歴史研究の進んだ今日、古墳時代の国造が府中を本拠としたとは到底考えられません。しかし、地誌が紹介した影響でしょうか、この説は広く流布したようで、いつの間にか、古代の国府に都から赴任した国司の居館跡、あるいは国府の中心施設の跡地として喧伝されるのです。

国府の中枢施設は発掘調査によって大国魂神社の東側に存在したことが確認できますので、御殿地に求めることはできませんが、こうした景勝地に国司の居館が建てられた可能性は否定できません。少なくとも、府中の町随一の景勝地に古代の国司たちが足を運び、眺望を楽しんだことは想像して誤りないでしょう。彼等国司や家康が眺めたのは、写真とそれほど変わらない景色だったはずです。

最近になってこの御殿地に、発掘調査のメスが入っています。府中街道に面した僅かな面積の調査でしたが、古墳時代や奈良～平安時代の庶民の暮らしの痕跡が発掘されました。御殿地の西・南部分に関しては古代の遺跡が破壊を免れているようです。国司の居館や家康の御殿が一部ではあれ、残されているかも知れません。（深澤靖幸）

オープン 詩人 村野四郎記念館

「府中ロストワールド」と題し、60号から今号までこの1年間、市内の失われた風景と共に『あるむぜお』巻頭に載せられていた詩にどのような感想をお持ちになりましたか。これらはいずれも村野四郎の作品です。

彼は、1901年(明治34)、多磨村^{かみそめや}上染屋(今は府中市白糸台)に生まれ、1975年まで、文字通り20世紀と歩を一にして生きた現代詩人です。

当館では2001年11月に、生誕100年を記念して、企画展「村野四郎と故郷—20世紀とともに—」を開催しましたが、この度、園内に復原されている旧府中尋常高等小学校の校舎内に常設の展示室を開設しました。

「村野四郎の詩はわかりにくい」と人から言われる、と本人も半分冗談で書いているくらいですから、一見難しいと思いがちの作品が多いかもしれません。しかし、童謡のように分かりやすい語句と耳に心地よいリズムだけが<詩>でしょうか。彼はその詩作の出発点から、感情に流されるだけの詠嘆^{えいたん}を拒否していました。

若い時から晩年に到るまで、彼は詩の中に物を冷静に見つめる眼を徹底させ、「もっと新しい、もっと時代的に切実な詩の機能を、ことばのうちにさぐろう」としていたのです。その中から現代

詩と写真の組み合わせということを、現代ではごくあたりまえのように見えていますが、この試みが日本で最初にされたのは、1939年(昭和14)、村野四郎の2冊めの詩集『体操詩集』でした。



記念館展示室



詩の一頂点と評されるような、人間の存在そのものを見つめた、時代を切り取る文明批評を擁する作品が生まれてきました。

ところが残念なことに、最近ではこのような生真面目で真剣な詩が好んで読まれることが少ないようです。というより、詩や文学そのものが読まれなくなっていると言った方があ

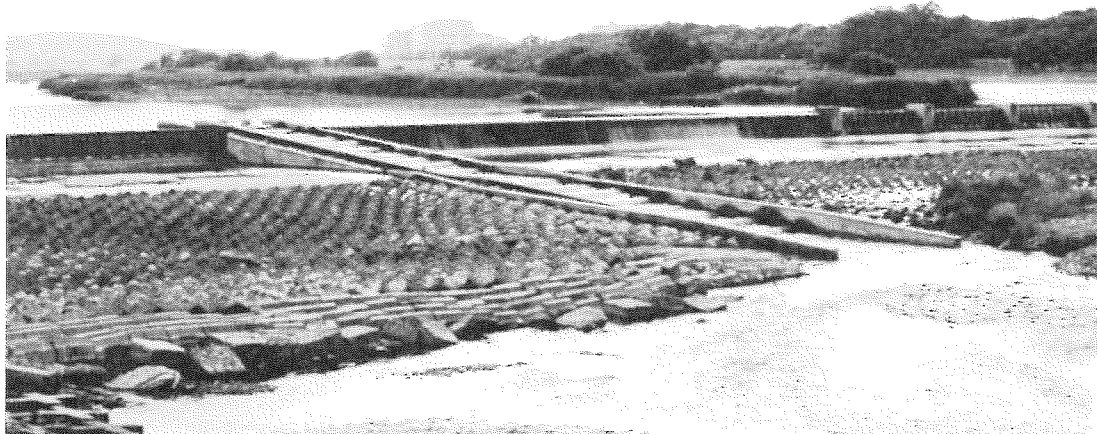
たっているかもしれません。日本現代詩人会の会長も務めた彼の名前さえ、よく知られているとはいえませんが。彼の死後、四半世紀の間に日本はますます軽く浮薄^{ふはく}になって来てしまいました。

しかし、混沌^{こんとん}と先行き不安の中に21世紀を迎えた今だからこそ、彼の作品はもっともっと読まれるべきだと思います。

展示は村野四郎の人と、何よりも作品を知っていたくことを目的にしました。詩集や愛用品の他、自筆の書、原稿など時季に応じて入替をします。開設記念として「四郎の手跡」と題し、中学生時代の姉への手紙をはじめ原稿、書など彼の各時期の肉筆をご覧いただけます。また、在りし日の映像や自作朗読も鑑賞できるコーナーを設けました。

小さな空間ではありますが、四郎について、また人間について、そしてあなた自身について考える時間を持っていただける部屋にどうぞお出かけください。

(馬場治子)



大丸用水堰の魚道 撮影：上田大志（多摩川センター）

繁殖や越冬のため、渡り鳥が南北を行き来するように、魚の世界でも回遊^{かいゆう}と呼ばれる習性を持つものがあります。回遊というと外洋を猛スピードで泳ぐマグロやカツオを一番にイメージしますが、海だけに限ったことなく、川に生息する種類の中にも海水域と淡水域を往復する回遊魚^{かいゆうぎょ}がいます。孵化^{ふか}した仔魚^{しぎょ}が川を下り、稚魚から成魚へと成長する過程を海で過ごし、再び産卵のため生まれ故郷の川に戻って来るという生活史を持つものや、逆に川で成長して海に戻っていくものもあります。この一生はまさに大河ドラマのごとし！特に故郷の川に戻った魚が、満身創痍^{まんしんそうい}で流れに逆らい上流を目指す姿には、生命のエネルギーを実感せずにはいられません。帰巢本能^{きそうほんのう}といいますが、すべての生き物が最終的に目指す旅の終わりは自身が生まれ育った場所だといいます。我々だって、一旦は家を出るなり独立するなり親元から旅立って行きますが、常に故郷を想い^{しの}偲ぶ点では例外ではないでしょう。出産のため里帰りする行為も同様の理屈なのかもしれません。さて、思い立ったら荷物をまとめて一路故郷を目指し…懐かしい風景が辺りに広がってくると気持ちも浮かれてきますが…あれ？道が寸断^{りくつ}されているぞ、どうしよう、ここから先にはどうやって行けばいいんだ！…こんな時はきっと切ないでしょうね…

▼不自然な川

川はもはや人間の関与無しでは成立しないほど、自然と人工がクロスオーバーしている環境です。人と川がいかに歩み寄って互いに有益な状態を作るかが争点^{せうてん}と言っても良いと思います。人は常に川の流れる方向を変え、

埋めたり削ったりしては地形をいじり、時には堰や取水口^{せきぐち}を設けて、水を自分たちの生活圏である市街地へと引き込みます。治水利水^{ちすいりすい}は人と川の根本的接点であり、それぞれの川の歴史を綴^{つづ}ってきたのです。大きなダムも上流部の何ヶ所かに建設され、都市の水甕^{みずがめ}として、そして流れる水量を調整する手段として存在しています。源流から上・中・下流と流れが続く上で、急流から緩流^{かんりゅう}に変わっていくといった本来の川の姿と、流れる水の一生を人間がコントロールしている現実^{げんじつ}は、密接に人間の生活圏が川とオーバーラップしているこの時代^{そしやう}にあって、もはや仕方ないことかも知れません。では遡上する魚はどうなるのでしょうか？大きなダムや堰が目前に立ちはだかった時、もはや前進することは不可能となってしまうのです。

それでも魚は相変わらず川のあちらこちらに泳いでいるわけで、数種類くらい川を上れなくても…なんて考えてはいけません！元来自然は自然のままに、全く手つかずにしておくことが理想なのですから…帰って来た魚が川を上れないなんて、全くもって不自然な話です。人間側の都合だけが優先^{ゆうけん}されていはいはおかしいのです。不自然は自然ではないということ、やがては魚だけの問題ではなく、川そのものの生態系にも関わってくることにかなりかねません。生態系は複雑な網の目が幾重にも交錯^{こうさく}する極めてデリケートな仕組みになっています。わずかな解^{ほど}れや小さな穴でさえ、バランスを崩すに十分事足りてしまうのです。ましてや川は手術^{しゅじゅつ}の縫合^{ほうごう}跡だらけの自然なのですから、アフターケアには過ぎるほど神経を注がなくてはなりません。以前新聞でこんな記事を見つ

けました。カナダの川を遡上するサケが、上流の森林そのものを育てているという内容です。

▼ 海と森をつなぐもの

ブリティッシュコロンビア州にあるビクトリア大学の生物学者が、同州周辺における100余の川で調査を行った結果、クマが遡上してきたサケを捕らえた後、この食べかすが森の重要な栄養分になっているという考えを導き出しました。その決定的な証拠として、似通った条件の川同士で、サケが遡上する川と遡上しない川では流域の樹木の年輪幅が異なるというのです。年輪、つまりはその木の成長度合いが、サケのいる川で広く、いない川で狭い傾向にあったのです。同じ川であっても、サケの上れない滝の上流にある木は下流の木よりも年輪幅が狭かったそうです。しかも過去半世紀の漁獲の記録がある川では、サケの遡上率の変化と平行して年輪の成長も同様だったといいます。

植物の光合成に欠かせない窒素の同位体N15は海洋中に多く含まれ、むしろ地上にはほとんど見られない元素です。実はこのN15が上流域の森を構成する木に顕著に認められる結果が得られました。そう、サケが海から運んできたことに他ならないのです。冬眠に備えるクマは一頭あたり700匹のサケを捕食するといいます。これに伴い土壌には平均100～200gの窒素が供給されるものと考えられ、これは造林用の人工肥料にも匹敵する量になるそうです。つまりこれらの川にサケが戻れなくなれば、周囲の森林にまでその影響が及ぶケースが生じてしまうというわけです。

現実には北米でもサケの遡上は減っているようで、森林伐採による河川環境の悪化や乱獲が原因と考えられています。ワシントン州ではダムが影響しているともいわれます。サケの遡上なくして森林の生物多様性の維持は保たれないのです。逆に言えば森が海へと返還する栄養も減少することになるでしょう。まさに悪循環、一つの事象が引き金となり、連鎖的に生態系を破壊していくというシナリオなのです。

▼ 多摩川の魚道

サケに限らず川に生息する魚のほとんどは、回遊とまではいかなくとも日常的に川を上ったり下ったりしてい

ます。そこで人間は考えました。ダムや堰があっても魚が自由に川を行き来できるような環境を作ってやろうと。身近に流れる多摩川の例では、国土交通省による「川づくり推進モデル事業」として、魚道の設置・整備をあげることが出来ます。魚道とは読んで字のごとく遡上・降下する魚の通り道を意味します。魚の泳げる環境づくりについては、全国に先駆けたモデル河川として指定され、平成4年より進められてきました。川の地形の特徴や魚種に合わせた魚道の整備はもちろん、魚が魚道を見つけやすくすることや、遡上魚と降下魚の両者に配慮するなどの努力が見られます。多摩川の場合は、天然分布魚種の中から8種を選定し、それらの生息域を考慮しながら、ダムや堰などに魚道の新設・改築を行ってきました。多摩川にサケはいませんが、ヌマチチブ・ウナギ・アユ・ギンブナ・マルタ・ボラ・ヤマメ・サクラマスといった種類が対象です。サケとは反対で成長したウナギは産卵のために海へと川を下りますし、マルタやボラも上下往復します。ヤマメは上流の魚ですが一部は海へと下り、再び戻ってくる時はサクラマスに姿を変え産卵に臨みます。魚にとっては、一方向だけ配慮されていても機能しないのです。この事業を開始した平成4年頃にはまだ各所の堰やダムに魚道は完備しておらず、河口から上流までの道のりは完璧に繋がってはいませんでした。

昨年、約7年の歳月をかけて、上流部白丸ダムの魚道が完成しました。実験ではいくつかの種類が遡上する姿が確認されています。但し白丸ダムと河口の間では、アユなどの遡上を阻害する落差が数ヶ所に及ぶため、改善改修の必要があるようです。また、羽村や大丸堰の魚道も完成し、魚の通り道は完備しつつあります。魚道が出来たからと言って、全てが機能するとも言えませんが、何もしないよりは良いし、少しでも多摩川の自然と人との歩み寄りが有効な形で折り合えたらと思います。

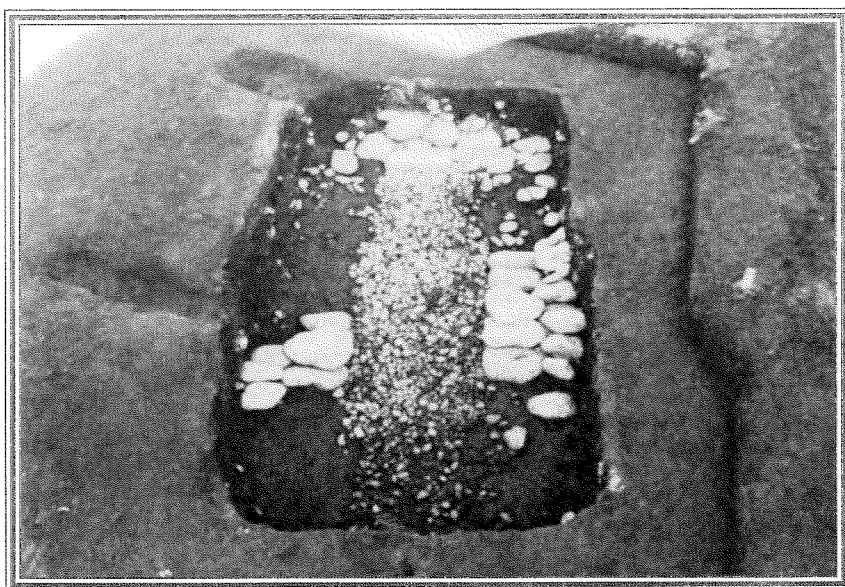
最近こんな記事を目にしました。2月3日付の朝日新聞で、「貯水目的ではなく、土砂災害を防ぐために造られた長野県・中房砂防ダムの魚道が機能しているのか疑問」というものです。階段状に2回に渡って折り返す型の計180mに及ぶ魚道は、とても魚が上流にたどり着けない構造だと書かれていました。加えて砂防ダムそのものが景観や生態系を破壊するもので、ダム建設の賛否を投げかける内容でした。あらためて川と人との関わりを考えさせられた次第です。

魚たちへの思いは、ささやかな通り道を設けることで伝わるものだろうか・・・そう簡単にはいかないようだ・・・ではダムや堰を壊す？造らない？・・・私達にとってはそれも具合が悪い・・・人間と自然の葛藤はゴールの見えないマラソンのごとく・・・



西府町で後期古墳を発見！

西府町1丁目 瀧柳宅地区から 府中市遺跡調査会 湯瀬 禎彦

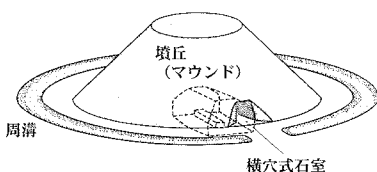


発掘された横穴式石室

今回は、昨年暮れに西府町1丁目で新たに発見された古墳を紹介します。発見場所は国立市境に近い府中崖線の縁際で、崖の斜面に生い茂る木々の間から遠くの富士山が望める高台にあります。発見されたのは古墳の石室と南側への通路、墳丘を巡る溝の部分です。墳丘はいつの頃に削られて全く残されていませんが、溝の内側が直径約10mの円形を描くことから、当初はこの大きさの円墳が築かれていたと思われます。石室は河原石積横穴式石室と呼ばれるもので、東西約1m、南北約2m、深さ約1mの長方形に掘り込まれた下半の部分が残されていました。その内部は壁際に30cm程の河原石が整然と積まれ、床面に小石が隙間なく敷き詰められていました。後世に人の手が加わったためか、河原石の多くは抜き取られていましたが、鉄製の鍬と刀の先端や鏑、金銅製の耳飾りなどの副葬品が確認されました。石室の構造や出土遺物から、古墳が造られたのは6世紀後半から7世紀前半頃とみられます。

この時期、多摩川に沿った府中崖線上には10～20m規模の小円墳が数多く築かれます。そして、これらは一定の範囲に幾つかのまとまりで存在するため、「群集墳」と呼ばれます。府中市域では東方に「白系台古墳群」と分倍河原駅西方に「高倉古墳群」があり、国立市の東方には「下谷保古墳群」があります。今回発見された古墳の位置は、高倉と下谷保の二つの古墳群に挟まれ、これまで古墳が未確認の地域に含まれます。このため、今回の発見により、西府町1丁目付近には新たな古墳群の存在する可能性ができました。一昨年には小柳町1丁目から古墳が発見（本誌58号で紹介）されていることから、府中市にはまだ多くの未発見古墳が地中に眠っていると思われます。また、近年府中崖線下にある東京競馬場内の発掘調査では、古墳が築かれた時期の竪穴住居跡5軒が確認されました。これにより、この時期の人々は崖上に古墳を築き、崖下に集落を営んでいたことも明らかになってきました。

このように古墳時代は、少しずつ明らかになってきています。そしてそれは、続く奈良時代に、なぜ武蔵国の中心の国府が府中市の地に置かれたのか、という大きな謎を探る上でも重要な意味を持つはずです。



古墳（円墳）復元図

分倍河原合戦の亡骨を求めて

前号まで、一九五四年に始まった国府跡に関する発掘や、それよりも前に試みられた電気探査を紹介した。これらの調査の多くは、甲野勇さんが主導的な役割を果たしていた。明確な目的意識をもった調査と先進的な試みは、考古学界の重鎮ならではといてよい。

しかし同じ時期、東京史談会を主催した菊池山哉さんの活動も忘れてはならない。むろん、甲野さんとともに調査を主導した場合もあったが、三千人塚（五五年）、首塚（五七年）、高倉遺跡（五九年）、山王塚（六四年）は、自ら計画・実施した調査であった。

とりわけ注目されるのは、三千人塚の発掘である。古代国府跡発掘の原点ともいべき片町遺跡の調査が一九五四年であったから、市域で実施された発掘のなかでも最初期に位置付けられる。

発掘の対象となった三千人塚は今も矢崎町に残る小さな塚だが、古くより大きな板碑が塚上にあることによつて知られ、鎌倉幕府を滅亡に導いた一三三三年をはじめ、いく度か付近であつた合戦の戦死者を葬つた塚と伝承されていた。一八三五年刊行の『江戸名所図会』によれば、塚上の板碑には「三千人の亡骨を埋蔵する」といった意味が刻まれ、分倍河原にて討ち死にした人の墓として紹介されているから、この伝承は江戸時代後期には存在していたこともわかる。こうした伝承をもとに、一九五〇年には東京都の史蹟に指定されていた（五七年に旧跡に変更）。

むろん発掘は、こうした伝承を実証することに最大の目的があつた。それと同時に、多量の人骨が出土することにも大きな期待が寄せられていた。この発掘に先立つ五二年には、鎌倉の材木座で鎌倉時代の人骨六〇〇体余りが出土して大きな注目を浴び、現代人と比較して頭が長頭で、丸顔であるという特徴が指摘されていたのである。こうした事情もあつて、三千人塚も、材木座の調査を手掛けた人類学の鈴木尚さん（当時東京大学人類学教室助教授）が計画段階から関わっていたようである。

残念なことに発掘はこの期待を裏切つて、多量の人骨が出土することはなかった。しかし、火葬骨を収めた骨壺が四つ出土し、ここが鎌倉・室町時代の墓地であることを明らかにした。そして、塚の上に立つ大板碑の銘文も精読され、「三千人の亡骨……」といった文言はなく、合戦よりだいぶ前の康元元年（一二五六）に亡き父の冥福を祈つて建てられたことも明確になった。

このように所期の目的は果たせなかったが、明確な目的意識を持つて調査の行われたことに変わりはない。しかもそれは人類学との共同作業であつた。今日、学際的な調査・研究の必要が強く叫ばれているが、五〇年近く前に既に実施されていたのだ。菊池山哉さんが主導した調査もまた、府中の考古学史に大きく刻み込まれる必要があろう。

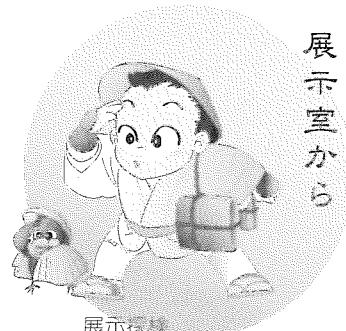
（深澤靖幸）



読売新聞三多摩版に掲載された発掘写真

8月14日朝刊。骨壺の取上げを発掘に参加した中学生たちが覗き込んでいる。この発掘も、府中1中、明星学園、国立高校の生徒たちが手伝った。壺は常滑焼き。中に入っていた人骨は鈴木さんが分析した。骨壺をはじめとする出土品の一部は、本館で収蔵している。

展示室から



展示探検

たびつとくん&たびがらす

博物館を体験する

常設展示室なんていつ行っても同じだからつまらない、一度行って見たらもう十分…。そんな風に思われる方が多いと思います。私たちも正直言って、もっといろいろと資料を時々に入れ替えて展示できたらいいのに…と思います。

実は、気づかれることはほとんどありませんが、以前とだいぶ資料を替えたコーナーもあり、似たような資料ですがところどころ入れ替えている箇所はあります。でも、目に付く大きな展示に変化がないと「変わった」と印象は薄いかもしれないですね。

それではせめても、というところで「ミニ展」と称し、ちょっとした特集をテーマに取り上げた小展示や季節に応じた「歳時記展」という展示をボランティアさんのご協力もあって常設展示の中に取り入れています。

でも、この博物館は常設展示や特別展示を見るだけの施設ではありません。外の広々とした園内へ出れば、市内にかつてあった8棟の復原建築物があり、郷土の森全体がまるごと府中を表した博物館なのです。その中の一つの農家の建物の中では子どもを対象にした「森のお話し会」、小学校の建物では多摩川を紹介している「多摩川ふれあい教室」、また、ふるさと体験館では職人さんの実演などはじめ、昔遊びや折り紙教室などを見学したり体験することができます。

見るだけではなく、作ってみたいという方はわら細工、竹細工の体験はいかがでしょう。お米作りを体験したい小中学生は「こめっこクラブ」へどうぞ。展示室だと触らせてもらえない昔の道具を実際に手にして作業する体験学習です。考古学に興味のある子は、夏休みに縄文土器作りにぜひチャレンジしてください。これらのもの作り体験を通して昔の人の知恵を知ることでしょう。

そう、郷土の森博物館ではほかにもさまざまな講座、観察会、見学会、といったメニューが用意されています。まずは「情報の蔵」常設展示室をスタートに、未知の発見と感動を探しにいらしてください。

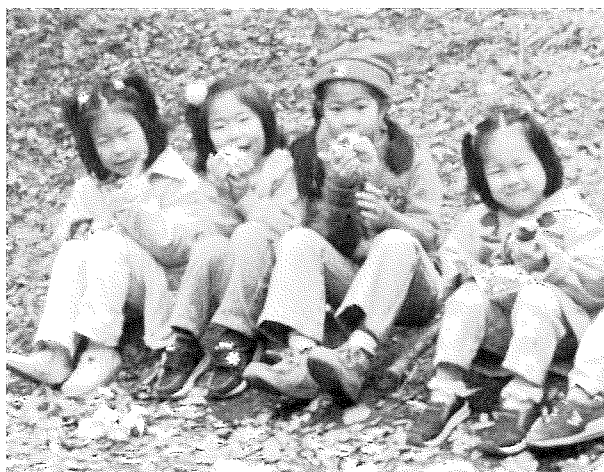
それでは、お目にかかるのをお待ちしております！（Y.Y.）

元気！

博物館ボランティアだより ④

今回は4グループめの園内景観班の紹介です。

郷土の森博物館には、多くの花木・草花が植えられており訪れる人々に四季折々、その愛らしい姿を見せ、心休まる芳香を漂わせ、やすらぎの一時を与えてくれてあります。土いじりの好きな園内景観班21名の作業は草花の育成・畑の管理であります。作業領域は年々増加し、入館して直ぐの博物館前のプランター、尋常小学校前の花壇、やすらぎ亭前のポピーコスモス畑、旧越智家前の畑、芝生近辺の花壇等あちこちに散らばっております。活動は毎週月曜日、夏の雑草の茂る時期は月曜日・金曜日であり、その繁忙サイクルは植物の活性に同期しております。春は暖かさが増し、植物の根や芽が動き出すのに合わせて、徐々に活動も活発化していきます。夏は厳しい暑さにもめげず、雑草との格闘・水遣りに終始します。秋は春咲き



「落ち葉たきと焼きいもの集い」にて

球根（チューリップ、水仙、クロッカス）の根付けに追われます。冬は草花の活性も鈍く、やがて植物も冬眠の時期を迎え、我々の活動もこれに合わせて緩慢となり、やがて一時休止となるわけです。活動の喜び、悲しみは、草花が順調に成育し、蕾を付け、そして開花を見ることですが、それ以上に来館者からの「綺麗に咲いたね、ご苦労様」といった声掛け、植物を介した心温まる会話が何よりです。これからも来館者との触れ合いを大切にしていきたいです。

今後の活動としては、11月恒例となっている「落ち葉たきと焼きいもの集い」、昨年11月に実施した「パンジーを植えよう」といった自然体験等、来館の子供たちと一緒に作り上げる催しを増やして、より親しみのある楽しい景観作りに励みたく思っております。

（ボランティア 塚田敏之）